

江戸八百八町物語

柴田鍊三郎

田鍊三郎

戸八百八町物語



中央公論社

江戸八百八町物語

昭和三十九年二月二十一日印刷
昭和三十九年二月二十九日発行

著者 柴田錬三郎

発行者 宮本信太郎

印刷者 草刈親雄

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(561)五九二一・二九

振替口座東京三四

定価三五〇円

©一九六四

検印廃止

江戸八百八町物語 目次

その一	江戸っ子由来	七
その二	赤穂浪士異聞	三
その三	御落胤	五
その四	ゆすり旗本	九
その五	仇、討たれず記	六
その六	異変護持院原	一〇三
その七	有馬猫騒動	一三

その八 女中・妾・女郎 一五

その九 大奥女中 一五

その十 五代將軍 一七

その十一 武士というもの 一五

その十二 賄賂 一六

江戸八百八町物語



その一 江戸っ子由来

慶長八年、江戸城の大改築が成り、東南の海辺三十四町を埋めたてて新しい市街がつくられた時、徳川家康は、大久保彦左衛門を呼んで、

「屋敷をつかわそうと思うが、どのあたりが欲しいか、申せ」

と、云った。

彦左衛門は、即座に、

「大名衆の屋敷を、一望のもとに見下せる台地が欲しい、こたえた。」

「では、望みのままに、おのれでえらぶがよい」

家康は、微笑して、云った。

江戸は、つくられたばかりの城下町であつた。欲しい土地を自由にえらぶことができた。

江戸を家康にくれたのは、豊臣秀吉であつた。

天正十八年四月、日本全土の大軍をもつて小田原北条氏を囲んだ折、一日、秀吉は、家康をと
もなつて、石垣山の本營から、脚底の小田原城を見下し乍ら、

「北条が減んだならば、あの城に、お許ごもとが移られたら、どうじゃ？」
と、すすめた。

家康は、つつましく、

「有難き幸せ——」
と、こたえた。

小田原城をくれる、ということとは、関東八州を与える、という意味であつた。

「では、ひとつ、小便など、あびせてやらうかの」

秀吉は、前をまぐつた。

「相伴つかまつる」

家康も、前をまぐつた。

二条の液体は、小田原城にむかつて、勢いよく落下した。

放出し終えた時、家康は、何気ない口ぶりで、

「関東を賜って、これを治めるには、この小田原は、ちと端寄りでは、ありますまいかと、云った。

「それも、そうなの」

「八州の中央ならば、この地より東に、およそ二十里へだてて、江戸城がござる。太田道灌が築いた城でござる。もう古びはてて居りますが、河を帯び丘を控えて、天然のまもりもよろしく、おゆるしあれば、改築いたして、すまいにいたしたく——」

秀吉は、その願いをゆるした。

並の頭脳の武将なら、天下に名をとどろかせた北条氏の居城を、大よろこびで、もらうところであった。あるいは、小田原が不服なら、嘗て幕府の在った鎌倉を申出るところである。

家康は、あえて、江戸を所望した。

当時、江戸は、どう見ても、関八州の太守の住むところとは、考えられなかった。

城といっても、かたちばかりで、構えはきわめて小規模で、濠もせまく、城壁すらもないと同様であった。町屋といえは茅葺きの家が百ばかりならんでいるだけであった。

東方は、ここもかしこも、汐入りの芦原がつづき、侍屋敷町屋をもの十町と割りあてられそうもなかった。西南は、渺々たる武蔵野の原野で、何処をしまりというべき様もなかった。

いわば、八方があげひろげられている地であった。

武将のすまいは、常に敵襲に備えて、地形がえらばれる。その常識からすれば、江戸は最も不

適地であつた。

家康が、居城に江戸をえらんだときいて、麾下の士らは、茫然としたことであつた。

家康は、別に、家臣たちに、なぜ江戸をえらんだか、その理由を説明しようとはしなかった。

天正十八年八月朔日に、家康は、江戸城に入った。

まさしく、城といつても、ただの館にも劣るものであつた。さきの城主遠山右衛門が、永々の籠城のままに、うちすてておいたので、いたるところ破損していた。板葺きの屋根を、兵火からまもるために土を塗っていたので、雨もりによつて、畳や敷きものは、ことごとく腐りはてていた。玄関の上り壇には、舟板の幅の広さを二段に重ねて敷いてあるほどの、そまつさであつた。石垣などは、ひとつも築かれてなく、みな芝土手であつた。

土手には、樹木や竹がしげつて、けものがちらちらとかすめていた。

城からすぐ海つづきになり、木戸門を出ると、漁師の小屋がならんでいた。遠山家のさむらいたちは、氣がるに城を出て、肴を買いもとめていた模様である。

慶長見聞記によれば――。

「天正のおうち入りまでは、高き身分も卑しきも、みな、松の柱、竹の編戸、葎わらの庵、蓬よもぎが宿、草葺くさむきの小家がちな軒のつまに、咲きかかりたる夕顔の白き花のみにて、蚊遣火のふすぶるも、哀れに見えて多かりし」

しかし、家康は、住むに堪えぬおんぼろ城に入った時、うしろにしたがっている本多佐渡守を

ふりかえって、

「できあがってしまつたものを貰うのは、誰にでもできる。何も無いものを貰って、自分でつくりあげるのは、誰にでもできるわざではない。そうではないか。佐渡——」
と云つて愉しげに笑つてみせた、という。

城の西北に、神田があつた。

神田というのは、むかし、各国に一箇所ずつ、大神宮の御供米を植える田が指定されていた——それをいう。

神田の背後に、高峻な山がそびえていた。神田山と、地下人^{ヒゲビト}たちは、称^よんでいた。

家康は、諸侯に命じて、千石に付一人の割で人夫を賦課して、この山を削らせて、城から東南のふかい入江を、埋めたたのであつた。(浜町、葭町、八丁堀、銀座、日比谷のあたりは、すなわち、神田山の土で作られたのである)

大久保彦左衛門は、仮宅である外桜田の松林の中の古寺へもどつて来た。

この地域は、大名小路になるべく、いま、屋敷造りで、昼夜、騒音をきわめていた。旗本たちは、西北に宅地をもらつて住んでいた。大番町といい、一番町から六番町にわかれていた。これは、賽の目に象り、陰陽四方に擬し、六番までの号数にして、一番町の裏を六番町にし、二番町の隣りに五番町を置き、三番四番を並べてあつた。

大久保彦左衛門は、しかし、番町に住むのをきらって、いまだに、古刹の庫裡に、起居しているのがあった。

家臣は、ただ一人、影の喜兵衛という、隻眼で、跛の伊賀の忍び上りを使っているだけで、足輕も中間も女中も置いていなかった。

「喜兵衛——」

居室で呼ぶと、廊下で、すぐ返辭があった。

「江戸の台地は、いくつある？」

「高輪台、白銀台、目白台、三河台、神田台、本郷台——まず、そのあたりでござる」

「もし、智能秀れた武將が江戸城を攻めるとすれば、どの台地を占拠すると思うか？」

「本郷台かと存じます」

「なぜだな？」

「本郷台よりお城まで、さえぎるべき天然の要害はござらぬ」

当時、江戸川は、小石川の水と合して、飯田町附近をすぎて、一ツ橋、神田橋の城濠に入って、下流は、日本橋川になっていたのである。

湯島吉祥寺前に、巨濠をうがって、これを神田川に疏せしめ、柳原筋に堤防を築く、という計画があったが、まだ手がつけられていなかった。

「よし。では、神田台を、すまいときめるぞ」

彦左衛門は、云った。

敵に本郷台を占領された場合、その台地の一部である神田台に、旗本が住んで、これを防ぐ任務に就くのは、戦略上の当然のことであった。

「早速に――」

喜兵衛は、一礼して出て行こうとした。

「待て、喜兵衛」

呼びとめて、彦左衛門は、

「薬を塗ってくれ」

と、双肌をぬいだ。

彦左衛門の全身には、無数の刀槍傷があった。

五十の坂をこえてから、季節のかわりには、痛むようになった。喜兵衛のつくる忍者薬は、よく利いたのである。

彦左衛門は、喜兵衛に、塗らせ乍ら、ふと、めずらしく、感慨をもらした。

「十六歳で、わが君に召出されて、およそ三十年、戦さの場をかけめぐって、つくった刀傷槍傷だ。妻子を持たず、忠義一途にはげんでの。……その働きで、賜ったほうびが、武蔵埼玉郡の二千石。喜兵衛、どう思うぞ、この知行高を？」

「……………」

喜兵衛は、黙々として、塗りつづける。

「あまりに醜いと思わぬか？」

「不平でござるか？」

「不平だ。三河譜代の旗本で、一万石を賜った者は一人も居らぬ。父を、兄弟を、子を討死させ、一族をあげて、奉公した者が、わずか千石か二千石の知行にあまじなければならぬ。……それにひきかえ、昨日は東方へつき、今日は西方へ寝返って、狡猾にたちまわった奴らが、十万石二十万石の国守になり居るのが、我慢ならぬわ。いいや、譜代のうちでも、口さきのうまい奴らは、いつの間にか、大名になり上り居って、行列をかざりたてることを、淫乱娘のように、よろこんで居る。そやつらの面を見るたびに、胸が、むかむかいたすのだ」

「……………」

喜兵衛は、なお、おのが意見を吐こうとはせぬ。

「喜兵衛、お前の考えを述べてみい」

「殿——」

「なんだ？」

「三十年のあいだに、殿は、無数のご朋輩の討死をごらんなされた」

「ああ、見とどけたぞ。惜しみてもあまりある若い逞しい、忠義のさむらいたちが、つぎつぎと、この世を去って行ったぞ」